宗像
毎月一日発行
発行所
宗像大社
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話 神湊 133番
定価一年送料共 500円

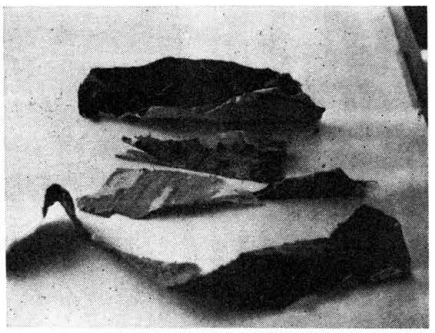
神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
福岡支社 福岡市吉塚西林寺町 九四 西林寺内
電話 ㊀ 六六六・三三四番
本社 京都市下京区油小路通六条北入六
電話 京都 ㊀ 七三三・九七九番

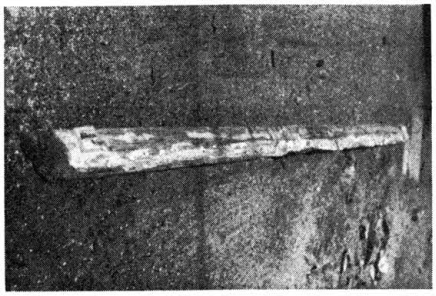
—各所の彩色痕跡から彩色施工に決定—

本殿の塗装工事始まる

四百年前の創建時に復元

当宮本殿の解体修理は、先般屋根工事を終え、現在、最終工程である塗装工事が進められている。従来、当宮本殿は無彩色の白木造りとして、長らく参拝者に親しまれてきたが、天正六年、創建時の棟札には漆三十缶、朱六貫使用の記録があり、これにより当初は内外部とも彩色が施されていたことが窺われる。そして、更に今回の解体調査により、文政三年（百四十年前）の解体大修理の折、天井裏の補強材に使用された垂木に、丹朱塗りの痕跡が発見され、これにより愈々彩色の事実が確認されるに至った。恐らく当宮では明治初期の神仏分離の折、人為的に外面の彩色を剥ぎ落したものと推察されるが、これを証する記録は見当らない。当宮本殿は桃山時代の代表的建造物として国の重要文化財に指定され、文化庁の指導監督の下に、今回の保存修理が行われているが、その施工に当っては、出来得る限り忠実に創建時の状態を再現し、これを末永く後世に伝えようというのが文化財保護の趣旨であり、この意味から今回の調査により明らかにされた本殿の彩色塗装が決定し、目下その塗装工事が行われているものである。





塗装内容は、内部及び外部軒廻りは丹と朱の混合、その他の外部の大部分は最高の塗装である朱漆塗りが施され、出来上りの色は紫色がかった赤、更に年月の経過と共に黒味を増し、落着いた色合になるとのことである。現在、塗装前の下拵えが行われているが、非常な難作業のように見受けられる。即ち、今回の解体修理は、文化財保存の趣旨から既存の古材が多く使用されている関係上、材部に多くの割れ目を生じ、木肌も非常に荒れているため、先づ割れ目に刻字彫（丸のみで割れ目を大きくえぐる）を施し、こうしてえぐった溝の中に漆を埋め、その上に三分巾の麻布を細長く張り込め更にその上に漆を塗り込める。特に大事な個所は、全体に麻布を張りつける。こうして下拵えをなした後、愈々本格的塗装が施されるが、下地は目の粗い木屑や、砥の粉と漆との混合塗料から次第に目の細い塗りに移り、一回一回塗装、乾燥の後に砥石で面を磨いて凹凸をなくし、こうした工程を二十五回程繰り返して漸く塗り上げられるのである。

完了は来春三月の予定であるが、完成の暁には、従来の白木の感じとは異った創建時の宮居を偲ばせる壮麗な佇いが再現されることであろう。

【写真上】御本殿内陣御扉内側に施されていた表貼の紙片。非常に上質の和紙が幾重にも貼り重ねられ、厚みもある。この表（黒い部分）と裏（白い部分）に塗装の痕跡が著しく窺われる。

【写真下】天井裏の補強材に使用されていた垂木の一部。写真でみる白っぽい所が塗装痕跡である。この他にも各所で多くの痕跡がみられた。

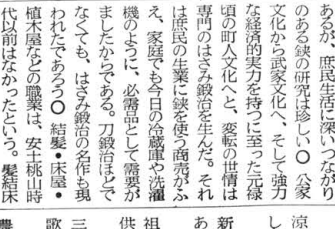
【工事状況を二面に掲載】

—秋季大祭に先だち—
沖津宮神璽奉遷祭

秋季大祭を間近ひかえた去る九月二十日、沖津宮神璽奉遷祭が沖津宮に於いて斎行され、中津宮に奉遷、同日午后三時同宮へ御遷された。

これは秋季大祭に先立ち、中津宮まで沖津宮様をお迎えする神事で、大祭当日は中津宮から両宮神璽がそろってお出ましになり、海洋を渡御（海洋神幸）されるので、それまで中津宮におとどまりいただく大事な神事である。

当日は波も高く渡島が危ぶまれたが、晴れ間の多い天候であったため決行された。例年通り沖、中両宮奉賛会の奉仕も多数あり、「国家鎮護宗像大社」の大幟や、御座船旗、御長手などがはためく御座船まで、多くの島民、参拝者がお出迎えし、盛大裡に無事中津宮神璽奉遷祭をうえた次第である。



沖中両宮 秋季大祭御案内

沖津宮、中津宮の秋季大祭が恒例により左記日程で斎行されます

この大祭は旧暦九月十四、十五日に亘って斎行されるもので、この日は漁止めをし、全島民はもとより近在の崇敬者等挙げての賑いをみせます。

記

十月十三日午后三時　地主祭
　　午后五時　両宮曾宮祭
十四日午前九時　御獄神社祭
　　〃九時半　沖津宮大祭
　　〃十一時　中津宮大祭
神賑行事—相撲大会、奉納演芸会

論説
明治八年の地租改正御旨意書

「昔から年々御年貢を上納することなるが、それは何故に上納することかといへば、御年貢は日本国中の御入用に御遣ひになるものなれば、日本の盛になる衰ゆる外国に勝れ負るも、多くは此御入用によることにて、又百姓のなんぎするも安楽なるも、多くは此年貢によることなれば誠に大事大切なることなり」

これは明治八年三月福岡県から、県内一円に配布された地租改正御旨意書の書き出しで、原文のままである。木版印刷で平易な仮名まじり文になっているが、旧藩時代のお触れ書から見れば、なるべく漢字の難しさを避けた文体で、地方行政も新政府の改新政治になって、一般の理解を大いに考慮している点が目につく。

宗像郡内にも各地に所謂新税法の旨意徹底が図られ、藩政から一転しての国家が説かれ、前述冒頭の数行にも、国家意識の喚起と納税義務の自覚を呼びかけている。四民平等の時勢とはなったけれど、税法の主体は田畑の地租であり、農民が対象であった。これは今日と違って、旧藩より仕来りの年貢の法は不公平もあるから是正すると言いながらも、穀類課税基本理念は改められてはいなかったのである。

少しく内容を検討してみると、今日の喧しい税金問題とくらべて、文章の表現が決定的断定的と言える。後の時代のように国会の地方議会の審議を経て公布される法令や条例でないから、やむを得ない結果であろう。

「今上皇帝陛下深く御心配被為遊、諸府県の令参事等の衆議を御採用相成、更に諸官員の大臣方と御評定の上、地租改正法を御布告な給ふことなり」と明治新政の根本精神である五箇条御誓文に含まれた万機公論に決する光り地方政治にも見られる。然し「御改正の御法は、曾をつくし美をつくして一言も申分なきことはいう迄もなきこと」と続けて述べているのは、甚だ表現が断定的で手前味噌のきらいが強いが、封建異体は当時としては当然のことであろう。

次いで地券発行の趣旨を説明し、年貢の基準を田畑売買の価格におき、具体的な数字を挙げて計算方法をこまやかに解説しているのは面白い。収穫米から種代や肥料代手間賃を引去り、更に百分の三の年貢と百分の一の村税とを引いて、残米を代金に換算して売買価格を定める計算法は、学識に乏しい一般農民に周知徹底させようとする努力が見られる。このありたい年貢算法に安心して正直に取調べよと付け足しているのは、今日の青色申告の勧奨に似ている。

文中に度々正実な調査と年貢上納の心得を説いて、国家の繁栄と外国との競争に勝つ努力を強調し、義務感を啓発し国家意識を高揚しようとする新しい行政手法が看取される。若し、その方針に副わず不誠実があれば、村中の総検地という厳しい手段がとられ、年々坪刈が行われて三年か五年の間実績調査が続くことにでもなると、村中の迷惑は甚だしい。詐りのない調査申告が、肝要である旨を教えているのである。

明治四年に劃期的な改革として廃藩置県が断行されたが、新体勢は直に申分のない法令の整備とはならず、又行政措置も下部末端にまで徹底しなかった。そこに幾多の不満が民衆の間に発生した。これを扇動したのが、俸禄を離れて生活の手段を持たない士族の不平分子である。彼等は新政府を非難し民衆の不平反感をあふって新秩序の破壊を企てたのである。

その頃中央政府からも度々指導査察のため官憲が派遣されていた。明治六年六月逐に嘉穂郡高倉山に百姓一揆の烽火が上り、宗像郡内を巡回していた憲二名を殺傷して各地に放火、郡内各地の不平も爆発してこれに加担し、大挙県庁内に乱入するに至ったのである。やがて鎮圧され首謀者の斬罪をはじめ、それぞれ処分をうけて一応落着したが、明治九年には秋月の乱が起り翌十年には西南の役と続いて、明治八年の地租改正の前後は世情不安定の時期であった。それを反映してか、福岡県地租改正の達示は当時としては物柔らかく懇切な内容となったものと見られる。

因みに「友の味」という言葉が当時あって、今日の黙秘権に似た点がある。親の罪はその子はかくしてよい、親の罪を申出でなくても問せられない、とあって藩政時代の親族縁者の連座制とは著しい変化と言えよう。

阿蒙少言

江戸時代からよく使われた言葉に、下手の長談義がある。馬術で下手の長あぶみ、裁縫で下手の長糸など長談義の仲間で、いずれも腕前のほどは高くない。馬麗と鋏は使いようで切れるが、対手の無能と道具の不備を、腕前でこなす好談義となる○鋏といえばある民俗研究家が書いた江戸時代の鋏と庶民文化との関係に就いての考察を読んだことがある。切れ物の中では刀剣が花形で、高名の刀鍛冶が心魂を打ち込んだ名作も少くない。従って刀剣の研究も盛んであるが、庶民生活に深いつながりのある鋏の研究は珍しい○公家文化から武家文化へ、そして強力な経済的実力を持つ迄った元禄頃の町人文化へと、変転の世情は専門のはさみ鍛冶を生んだ。それは庶民の生業に鋏を使う商売がふえ、家庭でも今日の冷蔵庫や洗濯機のように必需品として需要がましたからである。刀鍛冶はもとなくても、はさみ鍛冶の名は残われたであろう○結髪・床屋・植木屋などの職業は、安土桃山時代以前はなかったという。髪結床や浮世床は、江戸の絢爛たる庶民文化を象徴しているかの如く演劇講談によく登場している。ちょん髷にねじ鉢巻のいきな植木職も、庶民の生業として伸びたのである○現代は髪結床が美容院髪店に変り、植木職は造園業と改まった。江戸情緒を感じさせなくなったが、大工も建築師と称し、宿屋が旅館一杯屋が食堂の看板を掲げる時勢の推移は、何にも通ずる○按摩の起源はいつか知らぬが、今はマッサージ師で盲人は少い「お客にも、もまれ上手ともまれ下手があります。もまれ上手が私達をもみ上手にします」と、旅の宿でもまれながら講釈を聞く。手の方は一向に力が入らず、下手の長談義に終った。（白鷺）

第三回 宗像大社歌会詠草

毎月十五日〆切　詠草到着順

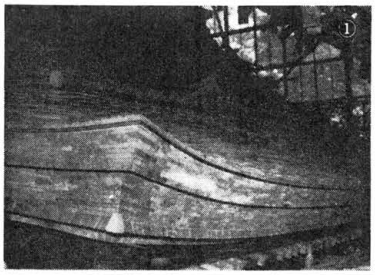
戸畑　安川　浄生
疾風に光りつゝ走るさざ波が湖にひたりし樹群に消ゆる
津屋崎　麦野　時雄
台風の過ぎたるあとの砂浜は波もおさまり清くさわゆか
田熊　鷺頭かつ代
健やかにわが身のある幸として汗にしみたる仕事着を洗ぐ
香椎　桜井　ツ子
眼冴えて暁をぞり沛然と短夜の雨到り去る刻
曲　天野トモエ
芙蓉の花初咲き二輪と記す八月も終りに近き朝
東郷　藤崎　辰子
紅燈の舟を映して眠える川面に鵜匠の手もと乱れず
深田　中野　節子
砂利を取るシヨベルカー幾つか動きて石狩川の流れは細し
田島　吉武　武雄
涼風を身に受けながら縁端にしばしまどろむ風鈴の音
福岡　麻生　初栄
新盆の客あまたにて疲れたり夜空あほげば月朱かりき
村山田　吉田佐市郎
祖先より祭り伝へし鈴社今も月々供物する
宮田　片山　一
三十六歌仙ならむ衣冠の額古りて歌読すべもなきはかなしき
吉武　白木うめ
農業の沈滞ムードの中に在りて牛飼いのみに吾が賭けんとす
福岡　江崎　琴子
足を病みて人にゆだねし尊とりを庭に降り立ち除くうれしさ
田久　小方　実
おひの中に建ち変りゆく江津宮の本殿の屋根少し見えそる
戸畑　藤井　孝子
世の中に石の数多けれど月の石こそ数に足りなむ
徳重　石松やす子
秋祭近づきたれば氏神の社頭に高く幟はためく
名残　竹原　円
我が家に引返しゆく郵便の赤いバイクが畑より見ゆ
田熊　小野角次郎
朝靄の玉砂利行けばさくさくと緑の奥に神はます
田熊　小野かをる
孫の弾くピアノ聞きつゝ厨辺に菜をきざむ手もリズム取りをり
深田　秀剛
気づかいて夜半に起き出る気配にて妻目さめ来て腰をみそれる
武丸　原田まつ代
むし暑き夕立過ぎし裏山は忍ち蝉の声時雨する
福間　森　八蔵
秋の野は七草咲いて静かなり大社をしのぶ古の神
大島　越智　治子
久々に訪れ給いし老いし母とともに湯あみて脊中すり合う
小倉　伊豆　仁江
神代より汚を知らぬ山桜朝日にほふ中津宮かも
宮田　北原　君子
長雨の晴れてさし来る朝の陽に山吹の黄のすがるとき色持つ
宮田　片山　朔子
豊作をうとまるゝ米と知りいても子を頼み外念に防除を終ゆる
津屋崎　占部　由久
アカシヤの枝より垂れし蓑虫の糸切れむばかり風に揺れおり
大井　安部　重郎
法師蝉来鳴く残暑の庭に佇てば百日紅は風に揺れをり
大井　安部　静子
一畝にも足らぬ畑に秋野菜もろ〳〵掘りは今日も脊れけり
田熊　岡部　緑陽
丘の上に星をみつめて祈りけり曙光（ひかり）のぼりて星消ゆるまで
武丸　立石ろせ乃
母を抜き父の背丈を抜きし孫たちあどけなき顔ののこりて
大井　木原ふさ子
一生に一度の事と桧柱の匂える座敷建て、すがしき
大井　吉田ますみ
求め来て育て、籠の鈴虫の声澄みゆきて深みゆく秋
原町　中村　幸
開通に間のあるバイパスの山道じゝさくさにゆく車送る
久留米　篠田太郎坊
浮世のすべての憂さを忘れむとこぼれ咲く土手の花菜に寄りぬ
武丸　立石　昇
入院後一と日をおきてわが妻は訪れて来ぬ予期せざりしに

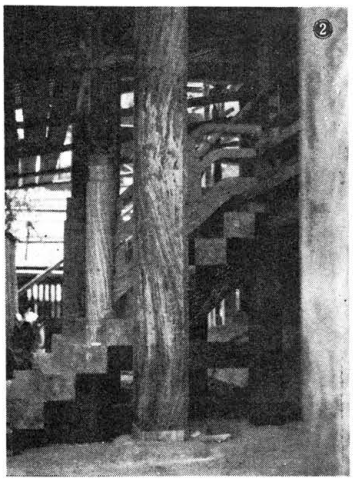
御本殿工事概況　漆塗工事中

一面に掲載の通り、各所に於ける塗装痕跡から、創建当時の当社の本殿が白木造りではなく、外部は漆塗で、内部は丹塗であることが確認されたので、この程朱漆塗に改める様決定され塗装工事に着手されているが、現在本殿修復工事は総工事の約七割かた進み、あと殆んど塗装工事と装飾部分のみとなった。

塗装工事は小西工芸社が施工しているが、工期は来年三月下旬まで。

この度の修復に於いては、出来得る限り創建時の姿に復すると同時に、御屋根に見られる水切等の新趣向も見られ意義深い。ここに写真をもって説明する。





写真①―完全に葺改められた御屋根、御屋根裏すぐ下に黒く線が見えるが、これが銅製の水切である。この銅板より下は雨水が伝わらないので腐りにくくなる。

また、写真に見えないが、御屋根表面は横に三十センチ置きに線を引いたように銅板のぞいているが、これは表面小板の下に銅板を加え、雨水が屋根裏く滲透するのを防くとともに、銅の毒性で防虫をなし、合わせて防腐剤の役をもさせるという新趣向。

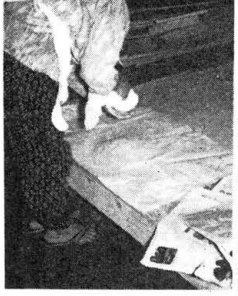
写真②―本殿正面階段側面と向拝柱、各所に彫刻が見えるが、これが刻苧彫といって、木の割目、補修継目等に施されるもので、漆塗をきれいに長く保たせる為のもの。割目等に直接漆を塗ると段が出来たり、裂目が生じやすくなるため、刻苧彫を施し、下地を塗り（漆又はカゼインと木粉をまぜたものを塗り込み平らにする）麻ぬのを貼り、その上に幾工程もの漆塗がなされる。

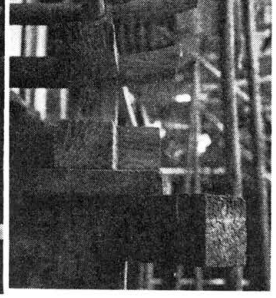
写真③―廻廊公欄の一部。やはり刻苧彫が目立つ。大変朽んでいるように見える部分も、材質が大変固く、大丈夫とのこと。

写真④―正面より内部を撮す。全体に黒く見えるのは写真が黒いのではなく、下塗が始まり、その下塗が黒いためである。

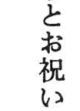
漆塗装は、本直（ほんなおし）、真掻（しんかき）、草掻（そうかき）とがあるが、本直しは主に軸部廻りなど外気にも直接ふれる建物の主軸たる所で風雨にも当りやすい大事な所などの部分になされ、大部分は一段落ちる真掻、さほど大事でなく、みにくい所は一番簡易な草掻が施される。尚内部は従来同様丹朱塗りである。

写真⑤―刻苧彫のあとを埋める木のとり粉の作業。のこすず等を布を通してとり出す。ほこりを出す様にして小さな木粉をあつめる。





宗像談話室　家庭のお祭りとお祝い（十）



(二)神道十三派

神道を教義とする宗教でありまして、それぞれ特殊の教義によって成立しています。これを神社神道に対して教派神道と称し、次の十三派に分かれているが、根本はいずれもわが国固有の所謂「神ながらの道」に発しているのであります。

神道大教　神習教
黒住教　御嶽教
神道修成派　神理教
大社教　禊教
扶桑教　金光教
実行教　天理教
大成教

神道を家庭宗教とするものの中には、一般の神道方式による外、前述の教派神道のいずれに属して信仰するものがあるわけで、その場合一般神社神道を信奉する者を、崇敬者と称するのに対して、他の宗教と同様に宗派神道を信奉する者を信者と呼んでいます。

宗派神道は、夫々教祖によって開かれ、今日ではそれぞれ盛衰を見るわけでありますが、新興宗教に圧迫されるか、教団の活動が消滅状態にあって振わぬものも少なくありません。

これを要するに、神道を宗教とする家庭で、教派神道のいずれかに属し、その教派の信奉するものは、その教派の定める方式で冠婚葬祭をするのが適当でしょうし、いづれにも属さないものは、一般の神社方式によって祭儀行事を行うべきでありましょう。

むすび

遠い昔、氏族ごとに大家族集団の生活を続けていた頃は、部落の神聖な場所に祭場が設けられ、集団的なお祭りや行事が、時を定めて行われたのであります。時代の経過と共に、生活上の利便から、また慣習の変化から、小家族の先祖まつりが始まりました。氏族の海外から移入されて、公共的施設の神社は勿論、家庭のお祭りやお祝いにも他民族の慣習が取入れられていることは否めません。

氏神さまの神社と、わけみたまの神だなは、今日に生きつづけてわが民族的信仰の生命と言えましょう。然し、長い歴史の変転のなかに、仏教その他の思想宗教が、大きなお祭りの施設は、後世の神社の姿に伝えられ、居宅の内に先祖を祭り、また特に信仰する神さまのために邸内祠が祭られたのであります。

殊に、一神教の特性の強いキリスト教は、信仰面に潔癖で厳しく、その信者は神だな仏だんとの同居を許しません。憲法も保証する如く、信仰の自由から言えば、その信者が排他的な信仰態度を堅持することもあり得ましょう。要は家庭の幸福、他人の信仰の尊重を考えて、調和を害わないことです。

信仰と言い宗教と唱えても、精神生活の根底となるものは、理美を求める愛情に外ならないのであります。これに反する信仰は、いかに強烈であっても邪道と言わねばなりません。

近代、急テンポの世情の変転は家屋の構造や衣食の生活を大きく欧風化してきました。家庭のお祭りもお祝いも、その生活様式に順応してゆかなければ、次第に忘れられたれてゆくかも知れません。家庭を空虚な冷い処にしたり、物質にかたよった精神不在の抜けがらにしないために、道義と信仰を守ってゆきたいものであります。

（T）

× ×

復興期成会事務局紹介

当社復興事業の心臓部ともいうべき、復興期成会事務局は案外人に知られていない。

同事務局は当社復興推進の為、事務統括部として、ある時は企画部として、またある時は工事現場の監督所ともなるが…全その窓口として設けられている。

同事務局には内田事務局長以下三名の局員が執務されているが、全員が出光興産株式会社のれっきとした社員の方である。この復興事業達成の為、同社の御好意により格別の派遣をいただき、携わっていただいているわけである。広く認識下さる様今号の紙面を借り、御紹介申し上げる次第である。

事務局長　内田　澄氏

大正十三年生れ。宗像町東郷に育った〝宗像っ子〟。福岡高等商業学校（現福大）に学ばれ、昭和十八年卒業と同時に出光興産（株）に入社。本社に一ケ月いて上海へ。ここを皮切りに大陸廻り。応召が一九年。二年一年に復員。その後は会社の最も苦しい時期にあって、タンク底入り、ラジオ売り。数ケ月～一・二年おきに西九州の支店出張所を廻り、その後門司、神戸、関東、新潟、本社、大宮、（営業所）大宮（支店）に勤務。四十年熊本出張所次長、四十三年富山支店長を歴任され、四十四年八月、福岡支店長代理として復興期成会事務局長に就任された。

趣味はスポーツ音曲と多い。剣道居合道（各四段）を好まれ、ゴルフはバツグンの腕前。それだけに偉丈夫で、戦争中は鉛の弾丸も逃げていたとか。名前はとてもやさしく、澄と書き〝きよし〟と読む。

竹井　良氏

昭和十四年五月、遠賀郡岡垣町に生まれる。どちらかと言えば学研肌の物静かな人物で、ニコッと笑われた笑顔は誠に良い。

それを裏ゑで名付けられたわけでもあるまいが、良と書いて〝マコト〟と読む。決して固くはなく、麻雀、パチンコ、なんでもこなし、その腕はプロ級？との下馬評。決して賭事におぼれず、全くの趣味程度にして楽しむあたり見上げたもの。学校はやはり宗高出身で入社は三十八年。独身。

井手明希正氏

出身地は佐賀市内で赤神の棄隠屋。昭和二十三年型で恥かしがりや。とても純情。佐賀商業高校出身で入社は四十二年。高校時代は野球部に籍を置き、名ショートでならし甲子園の土を踏む。今では目焼けもとれ色白の美青年。もちろん独身。

麻生明美さん

宗像郡宗像町生まれの宗像高校出身という生粋の宗像っ子。色白で純日本風の宗像美人で、心豊かな人。趣味は手芸とのこと。只今洋裁、料理、お茶やお花と花嫁修業中で大変なバイタリティの持ち主でもある。

こうのかなと　神湊

すばる（その二）

(7)

楠　早鳥作
福田長庵画

圏の中から、才市が再びその家を訪れたのは、すばるが旅立って一刻あまりの後であった。

「娘さんはいるかい」

手伝いの女はかぶりを振って「いくら止めても、すぐに宗像に行くと言って飛びだしたよ、まったく気の強い娘だ」

どうせこんな事だろうと思って来てみれば案の定だと才市は、女に俺が何とかするから心配するなと言いおいて、星明りの道をひたすらするのの後を追った。とうせ女の脚だ、せいぜい歩いても多々羅の渡しまでたどりつくのがやっとだろうとふんだわけである。

才市は歩きながら考えた、宗像まで行くのなら難渋な陸路をたどるより、なれた海の方が、この妙案に気がついて才市は思はず駆け出した、薄幸な女性との冊旅、その想いが若い才市を感激させたのであろう。

才市は圏の街道を駆けに駆けた。箱崎を過ぎた頃、道端の熊笹の生い繁ったあたりで白いものがふわりと動いた、誰かいるな才市は立止り窺いてみて声をかけた。

「一寸尋ねるが、若い女が通らなかったか」

「あつ！」

声よりも先に白いものが飛び出した。

「何だ、探したぞ、後でこんな事じゃあないかと思い家に行って後を追駆けて来たのだ、慣れない街道を行くより、夜明けを待って舟で俺が宗像まで送ってやるから」と聞かせると、すばるは後露ぬれた袂をかきよせてうなずいた。

聞けば、兎も角ここまで来るには来たが、何分夜のことではあるし渡しの場所がわからず、仕方がないので夜の白むのを待っていたと言う事である。

「そこらにかけようか」

才市は熊笹を踏み敷いて腰をおろした。すばるも側にうずまった。

まだ夜明けにはほど遠い、夜空を星が尾をひいて流れる。

この時刻にこんな場所で、若い男とただ二人で居ようとは昨日までのすばるには考えもつかなかった事だ、そう思うとすばるは身を固くした。

永い沈黙に耐えかねてか、才市が先に口を切った。

「この先の草津浦に出て漁師を見つけて舟を借りよう、この分だと海は凪だ」

すばるは、才市に宗像までの航程を小さい声で聞いた。その声を聞いている中に、突然、才市にこの娘にたいするいとしさが胸の底から湧き上った。夫だからってもった事のない感情をもてあました才市は、早口で夢中に、明方に発ては昼すぎには宗像の領内に入れるだろうと答えた。

虫の音が止んだ、野犬の遠ぼえも何時しか消えて行った、星もまたたきがゆるくなった。

「夜が明けるぞ、出掛けよう」

才市は立上ってすばるをうながした。川ぞいに下って浜に出て舟を見つけるのだと言って才市は早やに歩きはじめた。川を下るにつれて声の丈がだんだん高くなる。

あたりが白らんできた。すばるはともすれば見失いそうになる才市の姿を懸命に追った。

―箱崎の宮門、方二里蒐津浦と言か―と地誌に記される様にこの湿原は果てなく広かった。

「待って、もう少しゆっくり歩けばいいじゃあないか」

立止って才市が手をさし出すと、すばるは素直にその手にすがった。芦の高さは、とっくに身の丈をこえていた、それをかき分けかき分けて歩いて行く。

才市はこの芦原がどこまでも続けと思った。無理もない、ものいらいてから、海の上で苦れ男達の間で過ごして来た才市には異性とのこの様な一ときを持つことは予想もしなかったことであった。

足もとの湿原の感触がさわりのいい砂浜に変わる時、豁然と海が開けた。

「ざうっ」

大きな息をついて才市が足を止めた。

「さて、舟を見つけるか」

才市が独りつぶやいて足を大きく踏み出すと、すばるがぱっと手を放した、そして見る見る頬を染めた。

「どうしたのだ、急げ！」

才市は自分の胸の中を見すかされたような感じを打ち消すように強い語調で言って大きく歩き始めた。すばるも息をはずませてついて行く、二つの影が波にゆられてもつれて行った。

× × × ×

当社中津宮
参籠殿用地造成
―着々進捗し新段階に―

ここ数年来の懸案となっていた中津宮参籠殿建設並びに同用地造成は着々と進捗し、現在土留擁壁が完成し、土砂埋立がなされるに至っている。

この中津宮参籠殿建設問題は、現在の建物が早くより老朽化して使用に耐えず、ここ数年に至っては各所に穴があくなど痛ましいまでになり、かねうじて恒例の献上若布講聚のわりに使用する程度となっていた為、この状態を憂い、沖中両宮奉賛会を中心に沖津宮現地大祭参拝等ならびの崇敬者や特別崇敬者、里人などから再建の声が強くおこっていた。神社当局にあっても早くから考慮し、多方面に亘り種々検討されてきたが、現在の建物を修理改築するには不適当な現在の建物の礎材であるため新築しかなく、新築するとなると建造物の利用度、そこから派生する規模の問題とその価値度合、維持管理等々と種々問題があり、その調整等を急がれていた。その後現在に即した多様性、参籠殿としての立地条件等最終的検討がなされた結果、現在の参籠殿並其の敷地では狭く、立地条件も適当でないところから適当な建造用地が物色されていた。たまたま、昨年頃より前面海岸埋立に可能性強しの案が出で、県関係当局に打診したところ、その可能性は極めて強くなった折衝渉を重ね、一挙に解決の方向に進み、この度の工事となったもの。

日の里団地前
広場並跨線橋竣工

此の程、宗像郡宗像町「往宅公団ノ里団地」の玄関口として東郷駅裏に広場、および同広場への跨線橋が完成。去る八月三十一日、午後四時半から同広場で竣工式並びに渡り初めの式典が、当天社の司祭で盛大に挙行された。

祭典に引続き、渡り初めにつづいて、同町長石田重成氏の手によってテープが切られると、万雷の拍手が式場に響き亘り、盛大裡に開通された。

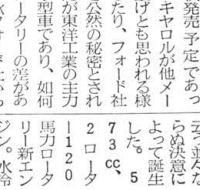
日の里団地は総面積が実に二八〇ヘクタール、将来の入居者数は二万人、戸数千戸と膨れる予定のマンモス団地で、此の度完成した広場は四五五〇平方米、公園形式で、中央にツゲ・ツツジ・フェニックス等の花壇があり、周囲には遊歩道が設けられている。又三〇台収容の駐車場もあり、夜間は水銀灯六基によって広場全体が照らし出されるようにと云されている。一方、陸橋は二の広場から国鉄線路及びホームを跨ぐ長さ延べ三十六米、幅三米のもの。これらの建設に要した費用は広場が一一八三万円、陸橋が一一五〇万円で、両者とも町の都市計画事業の一環として町費によって建設された。

年毎に北九州は西へ、福岡は東へと発展しつつあり、九州一のマンモス『日の里団地』はこれらの中間点に位置しており、北部九州一帯の産業文化発展途上にあってこの家を求めるにふさわしい模範的団地になるよう大いに期待してやまない次第である。

話題の新車をみる (四十四)
カペラの巻

自動車業界資本提携最後の台風の目である東洋工業も会社創立五十周年に当る今年中に米国フォード社との間に業務提携を行う雲行きとなって来た。今迄東洋工業は華かな噂が多い。一つに最近ではロータリー部門でトヨタ自動車と業務提携かと騒がれたし、ファミリア・プレスト、カペラに続いて今秋発売予定であったロータリー・キャロルが他メーカー等のつき上げとも思われる様な形で挫折したり、フォード社との提携交渉を公然の秘密とされたりである。だが東洋工業の主力はカペラ等の小型車であり、如何にレシプロとロータリーの差があるとは云え、今秋フォード社から発売する小型車「ピント」との調整を如何にするのであろう。何はともあれ業務提携の成果がフォード社による乗取りと云うような形で表れない事を期待して止まない。

創立五十周年を記念して今般発売のカペラは「主力車種として生産し市場に新風を送りたい」と云う並々ならぬ決意によって誕生した。5 73 cc、2ローター120馬力ロータリー新エンジン。水冷直列4気筒OHC、1586cc、100馬力の2タイプ、これ等をセダン、クーペの二車種に分けている。ルーチェよりも一廻り小さく、ブルーバード、コロナ1600級の車である。所でロータリーエンジンはレシプロ・エンジンとの様に比較するのは非常に興味深い。JAF国内競技車輌規定ではロータリー・エンジンの排気量を二倍にし、両者を対応させている。これによればカペラは2292ccとなり2・3リッター級シプロマンシンに相当する。勿論エター・スポーツの見地を持って比較することは出来ぬが、仮にこれを採用するならば、燃費の悪いと云われるロータリー・エンジンも力ペラの定地燃費率、60Km／h時、13、5Km／ℓからしてそれ程悪い燃費ではないと云う事になる。



〔沖ノ島便り〕
三笠宮殿下お手植石碑建らる

昨年月十一日、玄海灘に浮ぶ孤島沖ノ島に渡海され、宗像大社沖津宮に参拝された三笠宮殿下は、沖津宮境内、社殿脇に槙の若木を植樹された。

この若木の周囲は他の老樹が鬱蒼と生茂り、苗木の成育が懸念されたが、今年に入ってすくすくと伸びて高さ三メートルとなった。この傍に三笠宮殿下お手植えの石碑が去る九月二十一日に建てられた。沖ノ島殿台工事の為来島した友田組の奉仕によるもので、沖ノ島の海岸から碑は急斜面を交替で肉吸まで担ぎ上げられたのである。碑の高さ八十センチ、中十五センチ、御影石で厚さは久保宮司揮毫である。

大島に新名所
三年計画で牧場つくり

大島村（大島俊基村長）では新期事業として畜産振興に取り組み、今年から三年計画で新しい牧草地の開拓と、牧場造成が計画されこの程着手された。

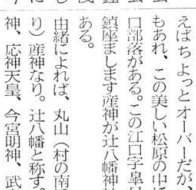
同村は糸島郡野北馬とともに役牛〝大島牛〟の産地として知られていたが、急速な農業の機械化等に伴い、農村で牛も見かけぬ昨今、その需要も年々に減少し、同村にあっても畜産人口が年々少なくなり、現在では肉牛用の小生産がわずかになされている。これも自然の牧草にたより放牧できるのはわず半年程で、あとは各戸の畜舎で飼育されるが、手のかかる割には牧益が少なく敬遠されがちだ。

それでも、これらの悪条件さえ解決すれば肉牛、牛乳等の需要度の高い今日にあっては、りっぱな産業になりうるし、あわよくば、自然放牧の観光資源新名所にもなりうる。

ここ数年来同村は、産業開発に観光開発と強々手がけてかんばしくなかっただけに、此の度の事業費千八百万円をかけての牧場造りにかけられる期待は大きい。広さは約六十ha、約百二十頭収容、サイロを設け一年中放牧できるようになるとのこと。離島産業開発振興の為ぜひ成功してほしいものである。

神郡宗像
摂末社を訪ねて (四)
辻八幡神社

四季を通して、自然の美しい玄海国定公園、中でもこの宗像郡玄海町神湊より江口漁港をへて、鐘崎に至る松原は美しい緑と、遠浅に打ちよせる白波、望む人をして、しばしの足をとどめさせずにはおかない。自然の美、それは今の世で一番大切なものとされながら、忘れられ、すてられつつあるものだ。しかし、人間は原始より生まれ、自然に帰る。ここに自然の美を望見する時、何人も心の〝寛文（一六六一年、江戸初期）の初、今の地に移せり、宗像末社記に辻原明神と記せり。



正月朔月、三月三日、五月五日、九月九日を神事と行り。今は九月二十三日を以て例祭とす。明治五年十一月三日、村社に定められる……云々とある。

又、境内社は、豊受、蛭子、須賀、大日霊、皐月社の五社が祀られている。その皐月神社は、古へは、田島、宗像宮の頓宮地にして、五月五日、大祭あり、競馬をも執行し、ありしと云う。又祭神、神功皇后は大子尾に無格社、原神社として祭祀ありしを、大正十四年四月一日、許可を得て合祀す。

ふるさと〝でばの浦島。といえばちょっとオーバーだが、ともあれ、この美しい松原の中に江口部落があるこの江口字皐月に鎮座ます産神が辻八幡神社である。

由緒によれば、丸山（村の南にあり）産神なり。辻八幡と称す。祭神、応神天皇、今宮明神、武内大臣なり。此祠は、宗像七十五社の其の一にして、昔は是より南十三町許、辻原（又は八幡山と称あり）にあり、故に社号となれり。

本殿流造り、拝殿、社務所を有し、江口部落より、南に数町の八幡山に鎮座されている。この境内よりの展望はすばらしく釣川に糸たれる河口のタイコウボーの彫も川面にゆれる松影も、一幅の絵となり、往古の風情をさえ夢想させる。

× ×

宗像伝説　其の一〇四
沖津宮秘聞「子安天狗」

沖之島は古くより「おいわず」の島として一切を語り伝える事は言わず語らずの中にも数多くの謎を秘めて極一部の人びとしか知らない怪奇な話が伝えられている。

沖之島の南面二丁程離れて「小屋」「ミカド」「天狗」と呼ばれる三つの小さい島が並んでいる。この天狗の面にも似た島に因んで、沖之島には不思議な天狗が住んでいると伝えられている。事実天狗に出会って肝をつぶした神官や、漁師も昔からかなりの数に上ったらしい。

今から、約三百年程前、正保元年十月、時の沖津宮司河野甲斐守通利は沖津宮修復護営のために渡島した。古代よりの慣習に従い、海民は三十五日間の精進斎戒の後、深夜、神前に伺候すべく狭く険しい参道を這うように登っていった。漸く本殿にたどりつき、一息入れて、ふと、すぐ横のお釜蔵と呼ばれる屋根より高い巨厳の頂上を見上げると、僅かに洩る月明りの中に身丈十尺にも及ぶ大天狗が鋼杖を構えて佇立し、烏天狗が鋼杖を構えて佇立し、烏天狗ならぬ、オガチ天狗が十数羽飛翔乱舞しているのを見た。甲斐守はその異様さに気も動顛し、恐怖におののきながら、目を閉じ、歯を喰いしばり、夜が白むまで座して動く事が出来なかった。翌日同行の総社大宮司宗像忌子千続に「常の状とは思われず、実に奇怪千万の事」と詳さに報告した。千続は折から執筆中の「沖之島御遷宮参候社人記」に天狗の件を追記しようとしたが、余りの不思議さに驚き、神秘に関わるものとしてついに筆を折ったと云う。

天狗は更に百年を過ぎた明治の初年に現われた。

その日、台風一過、仲秋の月が異様なまでに美しく照り輝き、真昼を思わせるような夜ではあったと、大宙でとなり、ともすれば意識がうすれゆく少年を鋼杖でつっつき、一晩中介抱し続けた。夜明けと共に、天狗は軽く一跳びして自宅の山頂に消え、少年はやがて元気をとりもどした。そして島の漁師にいたわられて無事に老略に帰ったと云う。

子供をさらったり、神隠しをする悪者天狗が多い中に、沖之島の天狗は子供を愛し、子供を救ける不思議な善者天狗であったため、いつしか誰いうともなく子安天狗とよび、現在も親しまれている。

× × × ×

沖之島の南面に三軒程離れて「小屋」「ミカド」「天狗」と呼ばれる三つの小さい島が並んでいる。この天狗の面にも似た島に因んで、沖之島には不思議な天狗が住んでいると伝えられている。事実天狗に出会って肝をつぶした神官や、漁師も昔からかなりの数に上ったらしい。

今から、約三百年程前、正保元年十月、時の沖津宮司河野甲斐守通利は沖津宮修復護営のために渡島した。古代よりの慣習に従い、海民は三十五日間の精進斎戒の後、深夜、神前に伺候すべく狭く険しい参道を這うように登っていった。漸く本殿にたどりつき、一息入れて、ふと、すぐ横のお釜蔵と呼ばれる屋根より高い巨厳の頂上を見上げると、僅かに洩る月明りの中に身丈十尺にも及ぶ大天狗が鋼杖を構えて佇立し、烏天狗ならぬ、オガチ天狗が十数羽飛翔乱舞しているのを見た。甲斐守はその異様さに気も動顛し、恐怖におののきながら、目を閉じ、歯を喰いしばり、夜が白むまで座して動く事が出来なかった。翌日同行の総社大宮司宗像忌子千続に「常の状とは思われず、実に奇怪千万の事」と詳さに報告した。千続は折から執筆中の「沖之島御遷宮参候社人記」に天狗の件を追記しようとしたが、余りの不思議さに驚き、神秘に関わるものとしてついに筆を折ったと云う。

天狗は更に百年を過ぎた明治の初年に現われた。

その日、台風一過、仲秋の月が異様なまでに美しく照り輝き、真昼を思わせるような夜ではあったと、大宙でとなり、ともすれば意識がうすれゆく少年を鋼杖でつっつき、一晩中介抱し続けた。夜明けと共に、天狗は軽く一跳びして自宅の山頂に消え、少年はやがて元気をとりもどした。そして島の漁師にいたわられて無事に老略に帰ったと云う。

子供をさらったり、神隠しをする悪者天狗が多い中に、沖之島の天狗は子供を愛し、子供を救ける不思議な善者天狗であったため、いつしか誰いうともなく子安天狗とよび、現在も親しまれている。

花いっぱい運動で
玄海小が特別賞

玄海町では七年前から新生活運動の催しとして〝花いっぱい〟運動がなされているが、その成果をみる審査会が、去る九月二十一日に行われた。同町教育委員や町議、公民館主事ら六人の審査員は、去る五月に配布した種子がどう咲きそろったか、学校や地区公民館等三三所を見て廻り審査した。各所いづれも甲乙つけがたい程見事に咲き、その成果に審査員各位も感嘆。学校の部では玄小が見事、特別賞を得、優秀賞は江口、釣山、優良賞は筵川、下大が得た。

社務日誌抄

八月二十二日 親和海運（株）新造船金山丸に奉斎の神饌拝受の為、同社々員二名来社。奉遷祭斎行。

八月二十三日 上京中の同田復興期成会事務局長より、当社復興事業募金の免税が八月一日付をもって官報にて認下公示されたとの朗報あり。

八月二十七日 沖ノ島調査団宿舎建設班井上団平氏外十人名沖ノ島に渡島。

八月三十一日 東郷駅構内跨線橋並東郷駅裏広場竣工祭。

九月一日 月次祭斎行。風鎮祭（公告明殿）斎行。

九月三日 沖ノ島より前記建設班帰社。

九月五日 午前十時より海上神事（秋大祭）打合会開催、郡内七浦漁協、水難救済所等出席。教育庁社会教育課二名来社、参拝。

九月八日 屯宮整地作業開始。

九月九日 秋季大祭補導協議会、学校関係、警察署関係にて。

九月十二日 秋季大祭四者会談左年前十時開催。警察署、土木事務所、保険所、西鉄関係者出席。

九月十四日 氏子評議員会年前十一時より開催。一八〇名出席。

九月十五日 大祭警備打合会。

九月十六日 地元消防団出席。

九月二十日 沖津宮神饌奉遷祭斎行。

九月二十日 沖津宮秘聞「子安天狗」

宗像大社歌会 俳句作品集 (九十四)

小倉　伊豆　湧泉

桐一葉やがて正午のチャイムかな

東郷　有吉　春子

防風のしなびてバックに浜の宿

福岡　入江　柳江

高々と竿一本の秋日和

武丸　野中　和子

時雨晴つきて国道事故多く

津屋崎　白石百合蔵

サロンパス誰か臭わす夜の秋

福岡　木林　照盛

蟬しぐれ社頭にぎわう神の森

東京　小浦登利子

白玉粉こねつ航海話聞く

田島　有吉　唐水

酔う客に早や短か夜の更けにけり

福岡　麻生　初栄

一人居の夜長思ひをほしいまま

田熊　小野　淡坡

秋深し合羽の雨は陽に光る

田熊　小野　花居

英語らし日語の二世夏の客

大井　安部　吟松

峡の戸の昼を灯して葛の花

久留米　篠田太郎坊

水門の魚黒うして児等遠し

出光佐三一問一答シリーズ (50)

働く人の資本主義

これはどういうことかと言えば、独身時代でもそんなにゆとりのある生活はさせておらない、そこで結婚すれば女房の食い扶持もいるし、社会的交際もふえるので、いままでの給料であればみじめな生活をしなければならない。これは親として見るに耐えないということなんですよ。

質問　給料は生活の保障であるということはわかりましたが、もし景気変動などによって実際それが保障できない事態がおこったときはどうしますか。

出光　一般に生活の安定といえば、最低賃金とか基準以上の賃金とかが問題になるようですが、出光には耐乏生活もまた生活の安定なりという考えがあるんです。そしてそれは終戦後十年間の事実が証明している。この間、われわれは極度の耐乏生活をやりましたが、ふしぎと生活の安定感はありましたよ。生活の安定を享楽と心得てはいけません。

私が創業以来五十八年間、従業員の生活の安定を考えておったということは、家をまず与えておる。創業時代から社員に家をさがさせたことはありません。終戦後、海外から引き揚げてきた千人の社員に対して一人もやめさせず、借金を抱えて仕事らしい仕事もなく、しかも家が極度に不足していたときでも、まず家を与えている。もちろん、一軒の家に二、三家族住むことはありましたがね。私は役所とか大会社でも、なぜ先に家を手当てしないかと言いたいですね。家を与えることが生活安定の絶対条件です。家があって食べるものにぜいたくしなければ、安定しますよ。私どもは終戦後まもないした耐乏生活をしてきますよ、私は耐乏生活をさせて申しわけないということを終戦後十年近く従年社員に託びている。そのときの耐乏生活が今日の出光をつくったということです。

生活の安定は享楽をするということではない。真面目な生活をするということです。そしてその生活の程度はそのときの事情によって決まる。

いまの世の中は耐乏生活は安定ということになっていないが、私は耐乏生活も生活の安定であり得ると思うんです。この耐乏生活の体験から、真の生活の安定とはいかなるものかを体得しました。そして反対に享楽生活は生活の安定をおびやかすということも知った。ですからいまでも、なにか大問題がおこったときに幹部の言うことは「戦後の耐乏生活にもどりましょう。タンク底に入りましょう」（注）ということなんです。過去の耐乏生活をかえりみて楽しむという心境になっていますね。

【注】終戦直後出光は石油業に復帰を許されず、たまたま政府より旧陸海軍のタンク底油集積作業を要請された。この仕事を出光に与えたことは、出光に大欠損を与えて破産させることが目的であったらしい。このとき、出光社員は全員なっぱ服をきてタンク底に入り、軍の力をもってしても集積不能といわれた泥廃油を貴重な物資と化して、国家のために活用した。非常にきびしい耐乏生活であったにもかかわらず、その奮闘ぶりは各方面の人びとに大きな感動と示唆を与えた。

質問　生活の安定と言えば、すぐ給料の額がいくらでということになり、またあればあるほど安定するというような考え方をしがちです。ところが出光の体験的結論は、生活の安定の基礎は別にあるということですね。

出光　給料が生活の安定のためのものであって、労働に対する報酬でないとすれば、それじゃ真の報酬とはなにかということになりますね。それは「お互いに仲よく助けあう」という簡単なことを、五十八年間味わって楽しんできたという一言につきます。給与のあり方についても、お互いを信じて無関心に様々なんです。そして時間を超越して働いていますが、これも上からの指図でなく、自発的に働いているんです。時間外手当を辞退した社員が、自発的にどんどん働いているのが、一般の人には理解できないらしいですね。

質問　終戦後のように社会全体が耐乏生活をやっているときはいいとしても、そうでない場合、たとえば自分の会社だけが業績があがらないというようなときはどうですか。

出光　経営というものは経営者だけでやっているものでもないし、また従業員だけでやっているのでもない。みんなでやっているんだから、会社が栄えているときはみなで楽しみ、悪くなったときもみなで耐乏生活をやれということです。

（つづく）

× ×

経営とは何かPFドラッカー

この国際金融機構というのは、経済学上のケインズの説いた方向に進みつつあるわけだが、私は国内的政策というものは国際的な場合とは逆に、正統派の従来の経済原則によってつくられねばならないと考える。問題はケインズと正統派の理論をいかに混合していくかという点であろう。

政府と産業との関連

第三の問題は、これも先進国が達成する大きな問題点である政府との国の産業との関連である。過去において、その関係が成功していればいるほど、将来においてむずかしくなってくると考えて間違いないと思われる。これは国々によって多少異なってくるのであろうが、今後変化が起こってくるであろうという推測には三つの理由がある。

その第一は各国の政府が自分の国の繁栄、成長および安定ということに気を配ると同じように、国際経済の繁栄、成長、安定ということに非常に気を配っていなければならないという点である。すでに先進国の一つの共同体ができており、その共同体の繁栄というものが、自国の繁栄と同じようなウエイトを持った問題になっているということがいえるのである。

第二の点は各国の政府が自国内の利害得失と国際場裡における利害得失というものを、はかりにかけてどちらかにふん切るために、十分問題を考え抜いて、政府、産業間の関係を調整せねばならないということである。

これはどこの国も同じような問題をかかえているといってよいと思うのであるが、伝統的な古い産業というものは、その雇用も大きく、またその数も多い。したがって選挙の面では政治的には力が非常に強い。そこで先進国の多くが障りやすい一つの誤った方向は、だ育成が十分に行なわれず、将来の機会をとらえるべき産業との二つの間に、はっきりした区分をつけざるをえなくなるのである。

政府と産業間の関係の変化をもたらす第三の理由は、経済の発展、経済の変遷というものが、あまりにも速度であるがために、政府がその変化を確実につかむ、正確につかむということが困難になっていることである。

たとえば一つの孤立したまり外向きでない国、あるいはその中の指導的な産業というものは、その基盤を広めがちであり、なんでもかんでも手をつけようとする傾向が非常に強いわけである。

一つの例としてあげれば、イタリアのモンティカティーニでは合成繊維から始まるあらゆる化学製品をやっている。非常に多品種をつくっているが、個々の売上数量はそれほど多くない。ところがそういったような国、あるいは企業が国際的な経済の仲間入りをした場合に非常な困難にぶつかるのである。

というのは、個々の製品についてはその規模がじゅうぶん国際的な競争にうかつためには小さすぎる。またあまりにも多様化し、いろんなものに手をつけているために、一つ一つを十分育成するための知識というものも完全に持ちえない。

そういったような企業が、国際的な開放体制にさらされると、ということが起こるか。非常に強力な整理、統合ということが行なわれる。

（つづく）

宗像藪庵先生百話

南方華やかなりし頃

油椰子

宗像太郎坊

日本人は、ほんとうに器用だと思ったのもこれが初めて、これから抑留中、折りたたみの剃刀・麻雀・パイオリンまでつくるのを見て感服した。

油椰子の実から造ったバターはジャカルタのチピナンという刑務所に抑留されている時にお目にかかった。私達は痩せ細った躰で、足踏みミシンから電気ミシンまでやらされた。そしてその僅の収入で、塩や黒砂糖・きざみ煙草の葉を買ったのである。野草の吸物に塩も入っていないから、自分のかせいだ金で塩を買って入れねばならなかった。オランダの軍服は、けちん坊のためポケットが多くて泣かされた。バターは高くてめったに買えなかった。そして色は実にうまそうな黄色だが、一般の評判は、いくら喰っても肥らんようだという話であった。

日本人墓地

メダンの街に入る少し手前、ペチサには日本人墓地がある。この墓地は明治三〇年、つぎのようなわけで出来たのである。

明治二九年メダンの土を初めて踏んだ槙田薩民氏はスマトラの草分けともいうべき人で、この人の話によると、そのころに死んだ邦人は支那人墓地の横に埋葬されていたということだ。

明治三〇年に槙田氏は、いつものように無造作に棺桶を運んで行くと日清戦争の怨みか、新しい墓の番人がいきなり「華僑会長の許可書を持って来たか」ときめつけた。支那人に頭を下げて許可書をもらうため、棺桶を二時間以上も炎天にさらされたままにしておかなければならなかった。こういったことが増えて、在留邦人の胸にはいい知れぬ怨感が湧きあがってきた。そしてついに皆が金を出し合って、二千五百坪の土地を買収し、今日の日本人墓地となったのである。椰子とチークの大樹に囲まれたこの墓地に屍を埋めた日本人は、昭和十七年五月には百九十九柱に上っていた。

私がこの墓地を知ったのは、昭和一七年三月、オランダ軍の大部隊を、コタチャネに向って追撃中である。当隊の某中尉が敗残兵に狙撃され大腿部を貫通された。運悪く股動脈を破られ、皮下に膊動する大リモールを作った。早速兵站病院に運んで片足切断の手術を行なったがまもなく死亡した。しかしこの英霊が外地で一人では寂しかろうというので、多くの邦人が眠っている日本人墓地に埋めることにした。こうしてわたしはこの墓地を知ったのである。椰子林に囲まれた墓地の日本人共同墓地と書かれた門をくぐると、小さい廟宮があり、覗くと七〇歳くらいの老婆とおぼしき婆さんが、よせばよいのに盛んに咳をしながら煙草を吸っている。長煙管で吸っているところを見るとこの人も昔、娘子軍として来島し、幾多の苦難の道を経て、今日に生き残っている人ではないかと思った。

左手奥には、沢山の墓石が林立している。よくもまあ昔、これだけの日本人が来ていたと思ったジャワのことは本や唄でよく知られていたが、スマトラのことなどは全然無知、全島ジャングルに覆われ、人間などは住んでいないかの感を与えていた。地理の先生の教えが、ふたたびよみがえってきたそうであった。わたしがスマトラのことをながながと書いているのも、ここで書いておかなければ、戦争中のことも、またその前のことも永遠に知られずじまいになってしまう。これが一つの理由である。

（つづく）

『宗像郷』

竹中岩夫

統風土記録御調子仁付神口書上帳控（波多野家文書第三輯）には「古宗像郡邑、御社および御宮所を悉く造営玉ひ、御祭をも執行し玉ひしとかや」と書いているが、中世からこの神社の神職を勤めていた波多野家には、江戸時代後半にもまだ「古々は宗像氏が祭祀していた」という伝承があったようだ。この神社の旧社地から「宗形宮帝賢寺」と刻文した、保延五年（一一三九年）銘の銅製経筒が出土していることはこれを立証するものである。「宗形宮」とは、宗像三神を祭る篠隈神社の本宮、八王子神社のことであろう。経筒の記年によって、八王子神社、並びに天の神宮寺と考えられる宮林の帝賢寺の創立が、平安時代末を降らないことが明らかであるる。

また「宗形宮」とあるから、その頃の八王子神社の祭神は宗像三神のみで、のち五男神が追祀され、「八王子神」になったのではなかろうか。八王子神社に祭られていない五男三女神（八王子神）の母神天照大神の合祀は、更に年代が降ると考えられる。

伊藤常信は「中間村に像宗と云処あり。是宗像の文字を上下に転と替えたるものにて、和名抄に出たる郷の名なるべし」と述べているが、これについて白井浅夫は「此はいとき誤なり。されば何れの頃より上下に替えたりと云に、此は天王の初め、麻生氏と宗像大宮司と遠賀川を中に置きて東西を争ひし時、麻生の領地に宗像と云ふ郷名あるを悪みて像宗と上下に転ス称へかえたるなるべし」と推考している。筆者も転倒説には賛成であるが、その理由は郡名宗像との同名によって生じる混乱を防止するためではなかったか考えている。常信が述べているように、中間には「像宗」という部落があったが、これが現在の「片峰」であろう。中間駅南西側一帯がそれで、現在は中間市の中心街をなしている。江戸時代の後半には「片峰村」とも呼ばれたが、遠賀郡誌による明治末期には百七十二戸を数え、長津村（中間村）最大の部落であった。ここがかつての宗像郷時代の宗像部落で、当時は郷の中心をなしていたと考えられる。

（つづく）